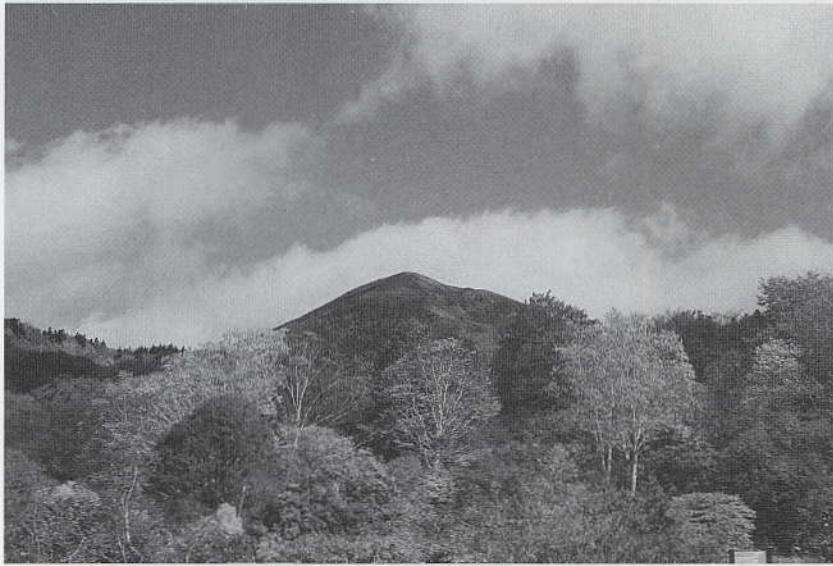


10月になると青森から紅葉の便りが届く。県内の紅葉はどこでも美しく、人それぞれ思い出の場所があると思うが、縄文時代の紅葉はどのようなものであったか。約1万5000年前から2300年前までの長い間、気候の変化もあり様々な風景が見られた。青森県で初めて土器が出現した約1万5000年前



八甲田大岳の紅葉

(鳥口天氏撮影・美しい色は青森に来て御覧下さい)

から1万3000年前は地球規模で氷期の時代で、現在北海道北部からサハリンにかけて生えているトウヒ・ツガなどの針葉樹林であった。このため、一年中緑一色の紅葉とは縁の無い世界だった。

東北地方に雪が多く降るようになる。八甲田山を含む日本海側では、ブナを中心とした落葉広葉樹林が広がる。一方太平洋側は乾燥し、コナラを中心とした落葉広葉樹林であった。

この頃から縄文人は集落の周りにクリの木を多く栽培した。花粉分析の結果から集落がある台地上に生えている木のほとんどがクリの木であったことが推定されている。クリの栽培は三内丸山遺跡が有名であるが、近年の調査により青森県内の多くの遺跡でも同様であったことがわ

かっている。さらに集落の縁辺部にウルシを栽培したことも考えられている。この当時、秋に八甲田山から青森平野を眺めると、縄文人の集落があるところは中心が黄色、周辺が赤くなっている、一目で集落であることがわかったかもしれない。約3000年前になると、八甲田山にアオモリトドマ

縄文時代の紅葉

伊藤 由美子

(県民生活文化課
県史編さんグループ 主幹)

時は緑と黄色の紅葉が見られた。

約1万年前以降、コナラ・ミズナラの落葉樹林が広がる。林内にはヤマウルシ、ツタウルシなども生えているため、黄色・赤の紅葉に変化した。

約9000年前、地球規模での温暖化により対馬海流が津軽海峡へ流れ込み、

ツガが広がる。それまで温暖化により平野から追われ、ひっそりと生息していたが、気候の冷涼化によりようやく八甲田山の山頂に生きる場を見いだしたと考えられている。現在八甲田山で見られるブナの黄色、ヤマウルシの赤、アオモリトドマツの緑という紅葉がやっと出来上がった。

では、縄文人は紅葉を楽しんでいたのだろうか。実は縄文人にとって紅葉の頃は最も忙しい時期である。クリ・オニグルミ・トチノキなどの実を採集し、加工する。遡上する鮭を捕獲し、冬に備えて加工する。キノコも採集したのであろうし、動物も狩っていたであろう。狩猟・採集者にとって、紅葉など森の変化は狩猟・採集の目安となる。我々のように景色として紅葉を楽しむのではなく、この木が色づいたら〇〇が獲れる、〇〇が美味しくなるといような、別の楽しみ方をしていたかもしれない。